

学会レポート：企画者より

2010年10月31日、札幌で開催された国際政治学会において、「ユーラシア地域大国の安全保障戦略」部会が実施された。この部会に企画の段階から関わった者として、ユーラシア研究の現状と課題について一言感想を述べさせていただきたい。

まず特筆すべきは、ユーラシア研究に対する内外の関心は非常に高いということである。ユーラシアに関しては、昨年の国際政治学会でも「ユーラシア地域大国外交の比較分析：ロシア、中国、インド」という部会を開催しており、本年の企画はいわば「二番煎じ」である。また、本部会と同時間帯で、すぐ隣の部屋では、「日本におけるリアリズムの伝統とその足跡」と題した超本格派の部会が開催されていた。学会は客商売ではないとはいえ、企画者としては「入り」が気になるものである。杞憂は一掃された。大きめの部屋がほぼ埋まっただけでなく、フロアからの質問が相継ぎ、部会は予定の時間を越えてしまったのである。

何がそんなに面白かったのか？先ずなによりも、報告、討論、司会のすべてのレベルが高かったことがあげられよう。中野潤三会員のロシア、毛利亜樹会員の中国、伊豆山真理会員のインド、いずれも極めて先端的な研究である。討論者の顔ぶれも、他の部会企画者から、「いいとこどり」と苦情がでたほどの豪華メンバーであった。即ち、斎藤元秀会員のロシア、高木誠一郎会員の中国、広瀬崇子会員のインドである。そして、参加者の皆さんは企画者の一方的要求、即ち「ご自分の研究領域以外の国に関して質問して下さい」に快く応じていただいた。そして、それらの多様な質問を司会者の石井明会員が巧みにさばいていただいた。

私見では、本部会の面白さは、個別の報告・討論を越えたところにあった。即ち、個別でも十分に面白いロシア研究、中国研究、インド研究が、共通のテーマ、この場合「安全保障戦略」、を論ずる場合に、ある時は互いに混じり合い、ある時は互いに突き放しながら、なんとも不思議な面白さを作り出していた。この感覚には覚えがある。そう、これはまさに世界の地域研究センターで日常的に起きている事態である。場所はロンドン大学だったり、バークレイだったり、ハワイ大学だったりする。いや、現在ではそのような「化学変化」が起きているのは、モスクワだったり、北京だったり、バンガロールだったりするのではないか。次回の展望も見えてきた。皆さん、次回は英語でやりますよ！

(了) (文責 学習院大学 中居良文)